

生徒の「わかりません」をムダにはいけない

生徒のねうちのある言葉

授業を覗いていると先生の発問に対して生徒が「わかりません」と答えたり、答えに窮してモソモソしている場面に出くわすことがあります。先生たちがこの生徒の「わかりません」にどう対処しているかを見てみると、5つのパターンがあることがわかります。

一つ目のパターンは、「じゃあ、これがわかる人？」と他の生徒に発問を転嫁し、その生徒が「正解」を答えたら「よし」と満足して授業を次に進める先生。

二つ目のパターンは、「じゃあ、隣（班）の人と話し合ってみよう」と唐突にグループ討議を始めさせる先生。

三つ目のパターンは、自分の発問が悪かったと反省し、あえて発問（発問の質や内容）を変えて生徒に答えさせる先生。

四つ目のパターンは、生徒が現時点でどこまで理解し、どんな考えをもち、どこにつまずいているかをていねいに聞き取ろうと発問を重ねる先生。

五つ目のパターンは、生徒の「つまずき方」をあえて授業の「核」として取り上げ、そのつまずきをクラス全体で分かち合い、教材を練り上げる手段にしている先生。

さて、私たちはどのパターンをとるべきなのでしょう。その答えを考えるには、そもそも生徒をどう見るか（いわゆる生徒観）を基底に考えなければならぬと思うのです。

どの子もわかりたがっている、伸びたがっている

一つ目のパターンは、厳しい言い方かもしれませんが、明らかに生徒を見捨てています。この生徒は、自分を否定され自信をなくしたまま授業を終わることになります。「次の授業もよしがんばるぞ」となることはないでしょう。

二つ目のパターンは、教師がしばしばやってしまう光景ですが、教師の「ご都合主義」です。「わからないからわからない」のであって隣（班）の人と話し合っただけで、たとえ教師が求める答えを導き出したとしてもそれは、本人の力ではとうていありません。

三つ目のパターンは、生徒に答えさせることだけを目的にしており（それで授業がスムーズ進むため）、生徒に深く考えさせたり、理解させたりする教師の営みを放棄しています。

そして結論。「どの子もわかりたがっている、伸びたがっている」という生徒観に立つなら、**四つ目のパターンと五つ目のパターン**を合わせることこそ、今、私たちが目指す授業づくりではないかと思うのです。

生徒は、教師がたとえ、同じ時間、同じ教材を使って授業をしても「感じ方」「理解のし方」「考え方」「つまずき方」が違うのです。それぞれのつまずきを上手にクラス全体に返していき、「なぜだろう」「どうしてだろう」「こうやったらいいかもしれない」とクラス全員で分かち合う授業をつくっていきたいものです。

「教師の問い」からではなく「生徒の問い」からでない私たちのめざす「主体的学び」にはなりません。生徒のつまずきにこそ勝負をかけるのです。

私たち教師にとって**生徒の「わかりません」ほど、ねうちのある言葉**はありません。